

# 千葉大附幼における大正末期から昭和初期の保育内容

中島 千恵子・鍛治 礼子

## Education contents in Kindergarten Related Chiba Women's Normal School in period from end stage of Taisho to beginning of Showa

Chieko Nakajima, Reiko Kaji

### Abstract

This research is about contents of education in Kindergarten Related Chiba Women's Normal School from end stage of Taisho to beginning of Showa. The original materials in the Kindergarten were lost because of the previous war, so we research external subjects before war. We have founded some old documents about child play or activities are similar from subjects of education in the Kindergarten today. There shows the principle of child education that teacher had at the past was child-centered, continue in even now.

### 問題意識

幼児教育における保育内容はどのように決められているのだろうか。幼児教育では、小学校以上の教育の様に子どもが使う教科書があるのではなく、保育者の側に大綱化された教育要領や保育指針が示されているのみで、実際の保育内容は現場の保育者の裁量に任されている部分が多い。教育要領や保育指針が大綱として示されている理由は、幼児期は発達の個人差や地域の影響が大きいためである。幼稚園や保育所、認定こども園を卒業するまでに達成したいねらいは五つの領域ごとに示されているものの、そこまでの教育の道のりや順序などの細かい部分は実際の子どもに合わせて指導していくよう保育現場に任されている。それだけに、一人一人の保育者は目の前の子どもの様子をよく読み取って、ふさわしい内容で保育を構成していくことが求められている。保育者が、教科書なしに具体的なカリキュラムや保育内容を一から考えて実践しなければならないことは、小学校以上の教師との大きな違いであると思われる。

そこで、保育者養成段階においては様々な保育内容について知ることがまず大切であろうと考える。保育

内容を自ら構成していくためには、幼児の発達を考慮する視点、日本の四季折々の自然を取り入れる視点、日本や地域の文化や伝統的な年中行事を傳承していく視点など、様々な要素を組み合わせる必要がある。その視点の一つとして、過去の保育実践について知り、良いものは取り入れうまくいかなかったことは参考にしていくことが大切であると考え。しかしながら、現在の養成課程においては保育史が必修ではなく、過去の保育の具体的な実践を学生が知る機会が少ないと思われる。また、教えている教師側にもそのような認識が少なく、過去の保育についての知識も十分でない。筆者らのいくつかの研究では、このような問題意識のもとで筆者らの身近なところから過去の実際の保育を調べ、現在の保育とのつながりを検討していくことを目的としている。

千葉県内で歴史の長い幼稚園はいくつか存在するが、筆者らが関わりのあった千葉大学教育学部附属幼稚園もそのうちの一つである。長い歴史があることは知っている（平成25年に創立110周年）、筆者らの勤務当時は過去の保育内容については特別注意を払っていなかった。また、戦前の資料は戦災のせいで全く残ってお

らず、目にすることもなかった。昨年度の研究では、まず過去の保育者養成ではどのように保育内容を教授していたのか、千葉県女子師範学校での教育について、千葉県で幼稚園が増えてきた明治後期から昭和20年頃までを概観した。師範学校における教授科目中には保育内容に関するものは見られず、小学校教員になるための科目のみであった。昭和初期からは保姆（＝当時の幼稚園教諭の名称）養成が始まったもののやはり師範学校の科目では保育についてのものではなく、附属幼稚園での実習において実際の保育内容を学んでいたということがわかった。このことから、師範学校で保育についてほとんど教授されない中で、卒業後に幼稚園の教員として勤務することになった保育者の先達は、実際の幼稚園の中で手探りの保育をしていたことが推測される。また、大正から昭和初期にかけての千葉女子師範学校附属幼稚園の保育について、職員の中に東京女子師範学校出身者（昭和3年着任の保姆山村きよ）がいて、東京女子師範学校で教授されていた保育の方法や内容などの影響が強かったことも伺うことができた（平成26年度本学紀要より）<sup>1</sup>。

昨年度研究を進める中で、千葉大学教育学部附属幼稚園の前身である千葉県女子師範学校附属幼稚園の保育資料の原本は残ってなくても、千葉県の教育雑誌や千葉県女子師範学校についての資料、東京女子師範学校関連の書物などの中に関連する記述のあることがわかった。今回の研究ではそれらの外部資料を通して千葉県女子師範学校附属幼稚園の当時の保育内容を探ることにする。

## 大正14年「千葉教育」より

大正14年（1924）年に発行された千葉教育1月号（通算第393号）は幼児教育特集号<sup>2</sup>とされ、当時の千葉県女子師範学校長平田華臈（「入学前の教養問題」）や安房郡千倉町朝夷尋常高等小学校長石井惣治（「私の学校の幼稚部」）などが執筆している。明治時代後半から徐々に幼稚園が創設されるようになってきた千葉県であったが、この時期になって県内教育関係者の間で幼児教育についての関心が高まってきていたようである。この

号の目次は次のようなものであった。

●新春・・・・・・・・・・・・・・・・・・	編者	一
●入学前の教養問題・・・・・・・・・・	平田華臈	二
●農村の幼児教育の必要・・・・・・・・	千女師附属	七
●斯く切実に思ふ・・・・・・・・・・	立花清治	一八
●幼児教育に就いて・・・・・・・・・・	岸邊福雄	一九
●幼稚園の連絡及び施設内容・・・・・	千女師附属	二四
●幼稚園実施案・・・・・・・・・・	全上	二八
●幼年児教育研究会概説・・・・・・・・	全上	三一
●新入園児の教育測定・・・・・・・・	中村佐忠	四〇
●朝鮮の風俗・・・・・・・・・・	武井友次郎	四九
●私の学校の幼稚部・・・・・・・・・・	石井惣治	五七
●欧米の天地より・・・・・・・・・・	杉浦邦司	六〇
◇学校だより		
●猪鼻便り・・・・・・・・●女子師範同窓会通信・・・・・・・・		六六
◇雑報		
●千師校創立五十年記念式と校友会	●手工講習会	●旅順
師範学堂生徒募集	●師範教育改善案	●文政審議委員任命
●国語調査会	●叙任辞令	●歳晩雑俎・・・・・・・・
		六八
◇会報		

●入学前の教養問題は、小学校教育に入る以前の子どもの準備教育の必要性を説いたもの、●農村の幼児教育の必要は文字通り千葉県のように農村が多い地域の子どもの達こそ新しい教育の恩恵を受けるべきであるという教育の原理についての内容である。●斯く切実に思ふは小さめのコラム、●幼児教育に就いては東洋幼稚園長である岸邊福雄による講演録であった。次の●幼稚園の連絡及び施設内容は、現状を報告しているものではなく、幼児教育の理想的な施設や設備についての概説で、幼稚園実施案も同様にあるべき姿を示したものである。次の●幼年児教育研究会概説は、この中で唯一当時の千葉県女子師範学校附属幼稚園の実際の様子が垣間見えるレポートである。そのレポートの中から保育中の幼児達の様子を描写した文章を紹介する。

途中雨を冒して幼稚園に着くと愛らしき幾多の幼児は夫々会員の前に来りて「先生お早う」「先生今日は」を連呼す。之に対して一々挨拶をすると皆喜んで立ち去る。中には忽ち怩

れて参観者に手をつなぐもあれば肩に飛び付くもあり、鞠を持ち来つて投げつくすものがあるかと思へば相撲を挑むものもある。元気な幼児になると数人揃ってきて脚に取付き倒さんとするものもある。其の無邪気な振舞に参観者一同は、幼児教育の愉快さを深く深く感じさせられた。

やがて幼児の作業が始まる。遊戯室中央の定め席に着くや周囲に立てる参観人には眼もくれずピアノの合図に一組は歌ひ一組は立って歌に合せて遊戯をするその様の愛らしさ。之を導く保姆のやさしさ。観る者をして幼児教育の面白さを感じしめずには置かなかった。次に保育室内の作業状態を参観したが、之亦言ふに言われぬ面白さを感じた。最後に幼児の会食の様子を参観し会場に引揚げしは午後零時半であった(P33)。(筆者注：原文は旧仮名遣いや旧漢字であるが文章の読み易さを考慮して漢字は現代のものに改めた。)

このレポートからは、まず、大正末期の千葉県女子師範学校附属幼稚園の幼児達がいきいきと行動していた様子が感じられる。参観者の大人が珍しかったのか、寄ってきては親しみを表す様子が描かれている。

保育内容について見てみると、まず朝の登園後、しばらく自由に過ごした後に、園児皆が揃って一斉活動をしていたことがわかる。遊戯室には座席が設けられていて、席は幼児ごとに決まっており、一組ごとの順番に歌と遊戯（いわゆるお遊戯であると推測される）を行った。整然と慣れた様子で歌と遊戯を行っていたようである。さらに、参観者がそれを指導する保姆のやさしさを感じるようであったので、一斉活動の中でも厳しい雰囲気はなかったのであろう、楽しんで活動する様子が伺えた。その後、各保育室に分かれて作業をしていたということである。この作業は、明治時代からの恩物の活動であったのか、他の内容であったのかは明示されていない。昼食は皆揃って食べていたようである。

登園してしばらくしてから一斉活動で歌ったり踊ったりするというのは、東京女子師範学校附属幼稚園では明治9年の開設当初から行われていた保育の姿であり<sup>3</sup>、東京女子師範学校附属幼稚園の保育として当時から広く幼稚園教育の方法として広まっていたものである。

この研究会のレポートでは、研究会2日間の中で関係者挨拶や参加者の研究発表、附属幼稚園保姆豊岡周による研究発表、幼児教育振興のためのいくつかの諮問と審議が行われている。また、東京二葉保育所主任福永恕氏による講演が行われたことが記されている。

当時の千葉県内の幼児教育の状況はどのようなものであったのか。「千葉県教育百年史」によると大正初期においても幼稚園数は10園ほどで私立が半数を超えていた(P1315)<sup>4</sup>。公立から整備されていた多くの他県に比べると整備・振興ともに遅れていると関係者が感じていたようである。本研究会において討議された次の様なテーマを見るとその意識が強いことが感じられる(「千葉教育」第393号P32-37)。

研究問題 其の一 尋常小学校幼学年教育に於て特に留意すべき事項如何

其の二 広く県下に幼稚園教育を普及せしむる方案如何

諮問案 小学校入学前の幼児に対する適切な教育的施設方案如何

建議案 幼児愛護デーを設け趣意の徹底を図ること、之に附帯してポスターを掲げて宣伝することを県当局に建議すること

女子師範学校附属農村幼稚園を設置することを県当局に建議すること

保姆養成所設置並に女子師範学校に幼児保育に関する課目を課することを県当局に向かって建議すること(本建議は野代たみ氏個人からの建議であった)

いずれも、千葉県において幼児教育を振興するための当時の問題意識が強く表れていると考えられる。千葉県では明治期から大正期にかけていくつかの幼稚園が設置されたが、一般には幼児教育の価値は知られていなかった。また、幼稚園を増やすにしても担い手の保育者を養成するための教育は後手に回り、女子師範学校では保育についての科目は教授されていなかったのである。

## 昭和2年「幼児の教育」より

このように千葉県では幼児教育については手探りの

まま進んでいたようだが、理論的支柱は東京女子師範学校に依っていたようである。昭和2（1927）年発行の「幼児の教育」に「この頃」という題で千葉県女子師範学校附属幼稚園の保育の様子が描写されている<sup>5</sup>。この時の実際の筆者は不明である。この文章では当時の幼児の遊びの実際の事例が示されている。報告されている遊びをまとめると以下のようになる。

- (一) 幼稚園ごっこ…幼児が自由に遊んでいる時に、遊戯室のピアノのところに集まり、先生役と子ども役に分かれて手遊び、お遊戯（花組と雪組に分かれて）、唱歌（ほたるこいこい）、行進をした一連の流れが記されている。
- (二) 汽車ごっこ…遊戯室の中で、シーソーを汽車に見立て、切符を買ったお客がシーソーに乗り、駅に到着するとシーソーから降りて切符を車掌役の幼児に渡し、また次の切符を買いに行く。
- (三) 戦争ごっこ…15、6名ずつ敵味方に分かれた兵隊役の幼児が砂場の前に整列し、大将役の幼児の指図で園舎の前まで行進し、花壇と植え込みの陰にそれぞれ分かれて大声を上げて鉄砲を打つ真似をしたり突撃の真似をしたりする。

また、文章の終わりに備考として以下のような付記が付けられている。

四月入園当時は元気良い子供は保姆達の両袖に五六人づゝもさがり、はては先生のうばい合ひ、弱い子供は附添の袖の下にかくれたり、又遠くの方でお友達の面白そうな遊びにながめて居る仕末に私達は毎日のお遊びを考へる事に一苦労でした。ところがしらすしらすの間に附添をもはなれ遊びの中心も先生でなくてすむやうになり僅か七八十日ばかりたったこの頃ではすっかり子供達の世界になってお互ひの間に色々な遊びが考へだされ平和な一日一日が続いております。幼稚園で、汽車ごっこ、戦争ごっこ、又はお砂遊びにままごとに幼児達はお互ひに発表し、表現し合つて種々な活動をいたして居ります。どちらにもありふれた事と思ひますが、あまりに平和なそして喜ばしいシーンと思ひ二三つ簡単に描写してみ

ました。(昭和二年・六月・二〇日) (P30)

当時の保育者の子ども観・保育観がよく表れており、自由な遊びの中でやりたい遊びを見つけ、自立して遊ぶことや「子供達の世界」の中で幼児同士が相互作用しながら遊びを進めていくことなどに価値を置いていると思われる。このような保育観は現在の保育者が一般的に持つ価値観と大変似ているのではないかと考えられる。身近な生活経験から自然に起こってくるごっこ遊びの中で考えたり工夫したりする様子は現在の幼児の姿と変わらない。幼児が自分達の遊びに没頭する様子を微笑ましく見守り、自由に自然な遊びを大切なものと捉えていたことが分かる。

大正14年の「千葉教育」では、登園してから遊んだ後に一斉活動やクラスごとに作業があったことがわかったが、作業内容についてはわからなかった。しかしながら、この昭和2年の記述からは恩物や他の教具等の作業があることは伺えない。「幼稚園ごっこ」「汽車ごっこ」「戦いごっこ」などは、現代においても幼児達から自然に表れてくる遊びであり、いつの時代も幼児は身近なことを題材にごっこ遊びをすることがわかる。そのような自然な遊びを通して教育を行う保育の方法についても、現代の保育方法と同様である。

## 昭和6年「幼児教育」2月号より

昭和6（1931）年発行の「幼児の教育」2月号（第31巻）では、渡部きよの署名入りの文章で千葉県女子師範学校附属幼稚園の幼児の活動が紹介されている<sup>6</sup>。今回はただ一つ「コドモ座誕生会の日に」という、保姆達が定期的に上演していた人形芝居についてのものである。昭和4年12月14日に初めて保姆達が人形芝居を上演して以来、定期的にコドモ座として上演するようになったという。

十二月十四日、今日はコドモ座誕生日、去年の今日私共の園では初めて幼児達に人形芝居を見せた日でした。(子兎とライオン、浦島太郎) 思ひなやんだ末にいろいろの物を組み合わせではどうやら物にした時の私共の喜び、幼児等の喜びは大したものでした。(中略) 幼児等の何よりの楽しみな土曜日は又私共にも待たれる楽しい日になりました。本校の講

堂である劇場に各児が手に手に切符を持って（広告の紙を細く切ったもの）喜び勇んで出かける足どりといひ、あの嬉しそうな顔といひ、これだけでも私の希望は達せられた様に思はれて嬉しくてなりません。（P48）

渡部きよは、保育者達による人形芝居の上演をしてから、人形芝居のある土曜日を幼児達がとても楽しみにしている様子やそれを喜ぶ保育者側の気持ちを率直に記している。

また、人形芝居の上演の意図や教育効果について以下のように記している。

人形芝居が幼児保育の上に及ぼす効果の数々はいつぞや倉橋先生から伺わせていただきましたので、皆様も御存じの事と思ひます。私はこの人形芝居が私共保育の任にあたる者にもいろいろの効果を興へてくれるものと思はれます。今私の感じました二三の例をあげて見ますと、

これによると、人形芝居は、当時東京女子高等師範学校教授だった倉橋惣三によって保育上よいものという認識を持っていたが、千女師附属幼稚園では実践したことがなかったということである。人形芝居の上演は当時してみれば新しい保育活動だったということであろう。倉橋惣三が園長を務めた東京女子高等師範学校附属幼稚園においても、明治期のフレーベルの恩物を用いた保育から、大正期に倉橋の指導のもとでより自由な幼児中心の保育に転換していった。人形芝居は、倉橋の影響で保育に取り入れられるようになったようである。しかし、人形芝居でも幼児向けの内容や長さ、演技方のものはまだ珍しかったのかもしれない。

この文章で、渡部きよは人形芝居の効果を3つ挙げている。第1は「幼児等の日頃の遊びの中に時々この劇が表はれて来ること」（P49）であり、遊びの中に断片的にでも劇ごっこのような形で再現されることに「しかしこれを演じて居る幼児等は勿論、見物してゐる幼児等も大喜びで居るのに驚かされる時が時々ございます」と記し、見た後に思いがけなく影響が残ることに手応えを感じていることがわかる。また続けて「それも初めが面白い事には鬼ごっこから遊びが発展してきて『七匹の子羊』になったり、おまゝごから『赤づきん』のお芝居になったり役割も勿論

幼児等同志で定められるのです。（中略）そして何度も何度も同じ事が繰り返されるあの心理にはいつも驚いております」と、遊びが想定を超えて発展し人形芝居の再現が遊びに織り込まれていくことや、何度も繰り返し楽しめることなどの驚きを語っている。

第2の効果として「お話に対する子供の心理的発達がよくわかる」ことを挙げている。登場人物や物への理解、興味、楽しみ方などは年齢によって違うことから「お話の材料、選択、方法等にも相当考へさせられると同時に又一方には大変よい参考となりました。」（P51）とし、幼児の反応や理解をよく捉えて次の人形芝居に活かしてきている様子がわかる。このような幼児の姿から出発して保育内容を考案するというサイクルは現在の保育と変わらないものである。

第3の効果としては、「幼児等の個性観察の機会が興へられる事」としている。人形芝居を見ている幼児達による反応の違い、個性の違いが観察できることを利点としている。

人形芝居の舞台は手作りの組立式になっており、持ち運びしやすいように作成されたという。カーテンも付いており明暗が出せたり懐中電灯でライティングしたりする演出もされていた。「倉橋先生の御言葉を拝借して申しますならば『まずさの程度』を越さない様注意して居ります」（P51）とあるので、おそらく手作り感を大切にしていたということではないかと思われる。

只今では保姆と実習生とで七種ばかりの物が実演出来る様になって居りますので事故の起らない限り毎土曜日には各組の幼児等が（一組約三十五名）ゆっくりと二つ位のお芝居を見物出来る様になりました。幸ひとお茶の水の幼稚園から脚本集を出していただいて居りますから今後共幼児等の楽しみをつづけて行かれる事と喜んで居ります。（P52）

脚本は東京女子高等師範の附属幼稚園で作成したものを利用していたようである。当時の東京女子高等師範学校が幼児教育をリードしていた指導的存在であったことの表れである。

現在の千葉大学教育学部附属幼稚園においても、劇の鑑賞と幼児の再現遊びは特徴的な遊びである。職員や実習生による劇（人形劇も含まれる）の鑑賞後に、

幼児が自分達でも遊びの中で再現できるような道具や装置を設定しておくものである。この活動が大変盛り上がる活動であること、保育者が驚くほど何度も繰り返し楽しめることなども、当時の幼児の様子に似ているのではないかと感じる場所である。このような現代の活動のルーツは昭和初期には既に行われていたことがわかった。

### 昭和7年「幼児の教育」3月号、11月号から

3月号では、「保育雑感」という題、千葉県女師附属幼稚園渡部きよの署名で、昭和6年1学期と2学期の保育の様子が記されている<sup>7</sup>。ここで、渡部きよは「主として自分のたずさわってある手技的方面からながめた一部分」の報告であるとしている（P53）。手技とは狭義には恩物の作業を指すが、ここでは広義の工作などのことを指しているようである。昭和6年4月に園舎が新設されたこと、保姆3名に幼児は90余名在籍していること、90余名を3組に分けていることなどがはじめに紹介されている。

・・・遊びにより作業により自由に各室を使用して居ります。そして三組の室には（一室は日本間）整理戸棚においてそれぞれ保育に必要な道具、材料等を入れて幼児の手で自由に使用できるし又整理させるようにいたしまして、いつの間にやら自然に作業によって各室内の遊びに別れ、保姆の興味の中心もまたそれぞれ別れて一種異なった保育の形式を取ってまいりました。（P53）

と、かなり自由な形式で保育していたことが伺える。そのような中で2学期の遊びとして、保姆が講習会で途中まで作ったボール箱のデパートを置いておいたことがきっかけとなり、幼児達が積み木等を利用してすぐに「売り買い遊び」が盛り上がったこと、最近の3、4ヶ月の間に千葉にも5ヶ所のデパート式建物が出来、幼児達も興味を持っていたのだということに気付いた、などのことが記されている。その後もボール紙等を使って保育者と実習生が一緒に店を作り、小物を保育者と幼児達が製作し、品物を売るといった活動につながっていったという。「オモチャ屋」「セトモノ屋」「ゴフク屋」ができ、そこで買い物をする楽しい活動になって

いったという。ここでも保育者の想定と違って思いがけないものがよく売れたことで幼児の心がよくわかり、保育者の思いだけで保育を進めることの誠めが述べられていた（P57）。このように、保育者がお店を積極的にお膳立てしてお店屋さんごっこをするというのも、現代のいろいろな園での保育でも見られる活動である。

3月号では他にも活動が断片的に紹介されており、六大学野球の影響を受けて幼児が野球をしたがり、保育者もルールを勉強して野球をしたこと、自由な製作、運動会見物、運動会、虫取り、木の葉拾い、毛糸刺繍によるままごとの敷物作り、歳末大売出しごっこ（デパートごっこと同様に製作物を売る）、冬休みに入る際に家庭に持ち帰る「お土産」としての柳飾り（「柳の枝に、つる、かめ、だるま、わかざり、羽子、羽子板等お正月にちなんだものを十種ほどさげて其の枝を持ってかへる」（P60））などが見られる。歳末大売出しの遊びや柳の飾りなどは現代にはない楽しさがあったと思われる。このように運動や製作のような表現活動、売り買いなどのある社会性に関連した活動など、当時も様々な活動があったことがわかる。

11月号でも渡部きよによって製作活動が紹介されている<sup>8</sup>。「九月、十月はなるべく戸外で過される様な予定をたてましてその自然の遊びから製作に引き入れ次に製作を主とした遊びにかへたいと思ひましたので、自然男女児の作業も別になりました。（P55）」と保育の意図が説明されている。次に運動会にまつわる男児の製作活動が次のような段階を踏んで述べられている（P56-57）。以下は筆者による要約である。

- （一）大運動会の1週間前に幼児達と話し合い、大運動会翌日から製作を開始することにした。開始までの間にすっかり材料を整え、幼児には旗や種目について話し合ったり暗示を与えたりしておいた。
- （二）大運動会後に製作を行った。ボール紙を使って台を作っておき、まず白くチョークでラインを引かせてグラウンドを作った。
- （三）粘土を用意して自由に人物を作らせた。期待した以上にいろいろな人物を製作した。
- （四）万国旗作りを行った。

- (五) 追加の粘土製作を行った。保護者席の人物や一般見物席、その他空いているところの人物の補充を主とした。
- (六) 粘土製作した人物像を一部分彩色した(文部省講習会で使用したガリバーテンペラ絵具を使用)。
- (七) 人物の補充、テント、入退場アーチ、周りの柵などを行った。
- 完成したら写真に記録する予定である。

このように、段階を踏んで長期にわたって製作活動が継続していることが分かる。渡部きよは、反省で「始めに私の計画では、テント張り、ピアノ、柵等は保姆実習生の手でいたすつもりでございましたのに見事幼児の手で仕上りそうで御座います」(同)と述べている。意図していたよりも幼児達がたくさん行えたようである。元々は保育者の側でお膳立てしているものだが、綿密な流れを見ると実際に幼児は無理なく自然な流れで実施できているように感じられた。

女兒の方は、ままごと用の食器を粘土製作で作ったり、毛糸刺繍でテーブル掛け、クッション等を共同製作したりしたという。いろいろな手作業が出来る様になり、記念に一人一人の手提げ袋作りに着手している、という報告になっている。手順は以下の様に紹介されている(筆者による要約)。

- ①1日目はクレヨンで下書きをする。
- ②あとは個別に指導していく。毛糸刺繍の縫い方は保姆と実習生が見て少人数ずつ行う。
- ③縫いあがったものは、保姆と実習生で裏をつけて完全な袋に仕上げる。

これらの作業についても、反省では次の様に無理なく行えたことが記されている(P58)。

気候の良い時に室内に於て細い仕事をするとはどうかと思ひましたが、大変幼児が喜んでする事ではあり(中略)…案内具合よくまゐりまして、朝のうちまゝごとのお友達を待ち合わせるとか、まゝごとを始める前、丁度顔も気も揃った時…等又は食事の後等に具合よく時を見付けて無理なく仕事が始められますのでやと安心いたしました。

この反省にあるような活動の内容や時期の選び方についての考え方、迷いなどは、現代の保育者も同じである。2学期は四季の中でも気候がよく戸外遊びも進め

たいが、手先のこともよくできるようになって製作意欲が高くなる時期である。現在の千葉大学教育学部附属幼稚園では、事例にあったような毛糸刺繍で大がかりな共同製作を行うというような活動は見られず、選択されている活動は違っているが、この時期の保育についての保育者の思いは同様であるように感じられた。

## まとめ

筆者らの関わりの深い千葉大学教育学部附属幼稚園を例に取り、現在ではほとんど分からなくなっている過去の保育内容について調べ、現在の保育とのつながりを検討するために本研究を始めた。園の資料は戦災で多く焼失しているため、外部の雑誌等の記載から保育内容が表れているものを抜粋して検討した。大正14年のレポート(千葉教育第393号)からは活き活きとした幼児の様子や歌やお遊戯があったこと、一斉活動として何らかの作業が行われていたことなどがわかった。昭和2年の「幼児の教育」(第27巻第8号)では、「幼稚園ごっこ」「汽車ごっこ」「戦争ごっこ」の3つの遊びが報告されており、現代も変わらぬ幼児の身近な事柄からごっこ遊びが生まれてくること、その自然な遊びを大切にしていたことがわかった。昭和6年の「幼児の教育」(第31巻第2号)からは、前年から新たに始めた人形芝居について、上演時の幼児達の様子やその後の遊びに人形芝居の影響が表れていたことが述べられていた。その様子は現在も千葉大学教育学部附属幼稚園で行われる、幼児が見た劇を再現して遊ぶ様子とよく似ており、現代の活動のルーツであることが推測された。昭和7年の「幼児の教育」(第32巻第3号と第11号)では、大がかりな製作やお店屋さんごっこの様子、運動会後に数々の手順を踏んで行う製作や毛糸刺繍による活動などが紹介されていた。数々の手順を踏むような製作については、現在は千葉大学教育学部附属幼稚園では行事後よりも何かの行事に向けて事前に実施することが多いように思われた。

ごっこ遊びのように幼児から自然に生まれてくる遊びを保育で活かしていく方法は今も変わらず、いろい

ろな園でも見られる保育である。製作活動についての進め方は当時のままではないものの、保育者が活動を「無理なく進めたい」という思いは共通である。大正末期から昭和初期においても現代と同様に子ども中心の考え方で保育が進められており、幼児ならではの発達の姿から保育が発していることが再確認された。

#### 引用文献

- 1 中島千恵子・鍛冶礼子 千葉女子師範の保育者養成と保育内容 千葉経済大学短期大学部研究紀要第11号 2015年 Pp77-82.
- 2 千葉女子師範附属 幼年児教育研究会の概況 「千葉教育」第393号幼児教育特集号 大正14年（1924）1月号 Pp31-39.
- 3 文部省 幼稚園教育九十年史 ひかりのくに昭和出版株式会社 昭和44（1969）年 P82
- 4 千葉県教育委員会 千葉県教育百年史編さん委員会編著 「千葉県教育百年史」復刻版第1巻通史編（明治） 教育新聞千葉支局 昭和53年 P1315
- 5 千葉県女子師範学校附属幼稚園 この頃 「幼児の教育」第27巻第9号 昭和2（1927）年9月 Pp27-30.
- 6 千葉県女子師範学校附属幼稚園 渡部きよ コドモ座誕生日の日に 「幼児の教育」第31巻第2号 昭和6（1931）年2月号 Pp48-52.
- 7 千葉県女師附属幼稚園 渡部きよ 保育雑感 「幼児の教育」第32巻第3号 昭和7（1932）年3月号 Pp53-61.
- 8 千葉県女子師範学校附属幼稚園 渡邊きよ 製作を中心とした保育 「幼児の教育」第32巻第11号 昭和7（1932）年11月号 Pp55-58.